



DISTRICT 2500

OBIHIRO

ROTARY CLUB

方針 One for All, All for One

一人はみんなのために、みんなは一人のために 会長 渡辺喜代美

No.3061

第3379回例会

平成26年 1月29日

2013-14年度国際ロータリーのテーマ

ロータリーを实践し みんなに豊かな人生を

■プログラム「ゲスト卓話」

「人と出会い 甲子園へ」

プログラム委員会

帯広大谷高等学校 野球部監督 網野 元



ただいまご紹介にあずかりました、帯広大谷高校野球部監督をしております、網野と申します。よろしくお願ひいたします。最初に、昨年の甲子園出場に際しましては、本当に多くの方々から、ご支援、ご協力、また、激励のお言葉等、賜りましたことを改めて感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

昨年、酒井さんより、このご講演の依頼を受けまして、校長にも相談したところ、「協力できることはぜひ」ということでした。また、大先輩の森田先生にも言われておりましたので、お断りすることができずに参った次第であります。

最初は、甲子園の時の簡単なエピソードなんかを話せばいいだろう、くらいにしか思っていなかったのですが、今年になって、1月の2週目ぐらいに酒井さんより、「この演題をどうするか？」というのを受けて、そんな大それたものかと思いました。また、酒井さんのほうに講演自体どのような内容が適しているのか確認したところ、「甲子園に行くまでに、たくさん苦労したと思いますから、その時の話など…」ということでした。ただ、発足当時のことを思い出してみても、当時の確かにつらかったとは思いますが、今、思い返してみても、自分自身にとって、大切な経験であったといえますが、必要な経験であった、という思いが強く、振り返ってみて、苦しかったとか、苦労したというふうにはあまり思っていないんです。そう考えると、自分自身で振り返って、甲子園に行くまでに本当に多くの人から刺激を受け、たくさんの方を教えられた結果、このたびの、甲子園出場という形になったわけですから、このように「人と出会い、甲子園へ」という演題にさせていただきます。

今回の甲子園メンバーに出会えたことも、もちろん人との出会いですが、この子たちは、その先輩を見て、帯広大谷の野球を見て入ってきたわけですし、その先輩も、そのまた先輩を見て、帯広大谷を選んでくれたわけですから、そう考えると、最初に入部してくれた4人の生徒との出会いが、その後のこの日までの形につながっているのかなと思います。この4人の選手たちにつきましては、後で、少し自分のエピソードなんかをお話しようと思います。

自分自身も小学校から大学まで野球をやってきたわけですが、野球をやってきたうえで、一番影響を与えてくれた人が、中学時代に出会った恩師の山本鉄弥先生であります。もう7、8年前に現職のまま、3月に退職予定だったその年の1月に亡くなったのですが、この人と出会わなかったら、高校でも、大学でも野球はやっていなかったかもしれないですし、もちろん教員や、監督にもなっていなかったと思います。私が、中学2年になるときに鹿部中学校から、知内中学校に赴任なさった先生なのですが、当時、鹿部中学校といえますと、函館を含む渡島地区では毎年優勝するような強豪チームの監督さんでした。中学校で全道大会に出るには、大変で、高校であれば、夏の選手権であれば、支部予選3試合を勝ち抜いて、3高校が全道大会に出場できるのですが、中学校ではまず、渡島の支部予選を3試合勝ち抜いて、そのあとに優勝校・準優勝校が集まって、全渡島大会をやりまして、優勝したチームが最後に函館市内大会を優勝したチームとの代表決定戦を行い、勝ち抜いた1チームだけが全道大会に出場するわけですが、山本先生率いる鹿部中学校は、何度も全道大会に出場し、全道優勝も2回、全国大会でも何回か、勝ったことがある先生でした。その先生が私が中学2年生の時に赴任してきました。それまで知内中学校は、1度渡島大会に出たことがあるだけのチームでしたが、その年は、渡島の西部地区一回戦で負けて、渡島大会にすら出場できなかったのですが、3年次には、渡島西部地区を優勝し、全渡島大会、そして、代表決定戦も勝って、全道大会に出場できました。全道大会では、2回戦からで、2つ勝つことができました、ベスト4でした。その山本先生から教わった野球が、現在までの私の原点にもなっております。例えば、攻撃の時のブロックサインは19種類あるのですが、その時のまま現在も使っています。実はこの山本鉄弥先生が私が高校2年生の時に知内高校に赴任しまして、後のまた、全道大会初出場になりました。自分は1972年、昭和47年生まれで、いわゆるベビーブーム世代なのですが、当時の知内高校は、定員を割り込んでいる、いわゆる全道高校で、野球部も一応あったのですが、ほとんど活動しておらず、一つ上の先輩は一人もいなくて、2つ上の先輩が4人くらいでした。そんな知内高校進学については自分の親も、同級生の親も反対で、山本先生に対しても、知内高校じゃなくて、違う高校に赴任するよう、お願いしていました。でも、山本先生は、知内高校へ行くという意志は変わらず、自分たちもまた、山本先生の野球がやりたいという一心で、親にお願いして、知内高校へ進学しました。この時の経験も、後に帯広大谷の監督になる自分にとっては生きたのかなと思っています。

そのあと、私たちの3つ下の代が、選抜甲子園出場を果たしまして、このときは、町立の高校としては、史上初ということでした。その後の甲子園出場はなかったのですが、何度も全道大会、南北北海道大会に出場した山本先生ですが、実はこの先生は、ご自身の野球経験が無いんです。鹿部中学校に赴任し、野球部の顧問を持った最初の頃は、遊び程度に放課後やっていて、土・日、夏休み中などほとんど休みにしていたそうです。夏休み中に1回、遠征という名目で、函館に、練習試合に出かけたというのですが、ある年、ものすごく弱かったんで、函館の小学生とやったそうです。でも、試合にならず、相手の監督に誤って試合を途中でやめたそうなのですが、その時に、函館の駅で、生徒に自由時間を与えて、デパートで買い物するなり、好きなものを食べてくるなり、言ったそうです。そうしたら、2年生は喜んで行ったけれども1年生は、出かずにいた。その1年生たちが翌日、全員丸坊主にしてきて、野球をいっぱいやって、うまくなりたいて言ってきたそうです。それでから山本先生は、本を買って野球を勉強したり、いろんな人に聴きに回って勉強したそうです。2年生たちはやめていて、丸坊主にしてきた1年生だけで練習したそうですが、その子たちが、3年生になった

1月15日例会 会員総数90名(内免除会員6名)

出席
報告

出席者数 61名

欠席者21名
(出免6名)

(名)

メークアップ 8名

90

時に初めて、全道大会に出場し、そこから野球にのめりこんでいったそうです。指導者の気持ち次第で、どうにでもなる、どうにでもできるということを実践したと思います。

山本先生は、打てなくても勝てる。ということを常々、言われてまして、正確なバントと、走塁を徹底的に教わりました。また、守備力も徹底的に鍛え上げられました。練習もいろんなパターンの練習を教えてもらい、監督になった現在も正直すべての練習をこなすことができません。本当はやらせたいんですけど、初めて北・北海道大会に出場した2008年は実はすごい選手が揃っておりまして、今回ヤクルトに入団が決まった杉浦が2年生の時なんですけど、もうこの選手たちで、全道大会に出場できなかったら、よほど、自分は、監督としての素質が無いだろうと思ひ、辞めたほうがいいのかなと思っていただけたほどでした。その2007年の冬の練習から、山本先生に教わった、野球を思い出して、それまでは、自分勝手に、この練習は、必要無いだろう、とか、あまり、数やらなくてもいいだろう。何て考えておりましたが、とにかく多くのパターン練習をやり、その練習の意味を勘違いしていたということがいくつも出てきました。そこから、やらなくてはならないことがたくさんあることに気づかされ、実際にそれらの練習をやることによって、また違った観点から野球を指導できた気がしますし、現在でも気づかされる点がたくさんあると思っております。

一方大学の時の恩師の丹野先生は、山本先生とは全く正反対と言ってもいいくらいで、とにかく打たないとダメだという監督さんでした。最初の頃、1年生、2年生ぐらいまでは、やっぱり、山本先生の野球が一番だと思っておりましたから、「何言ってるんだ」なんて思っ、言うことをきかなかったこともあったかもしれませんね。でも、先輩方も、みんな監督さんの言うことをしっかり聞いてやっておりまして、結果もきっちり出ていきましたから、北海道内ではほとんども負けることはなかったですね。ちなみに、大学野球は、春の大会と秋の大会の、年2回、全国につながる大会がありまして、春は、北海道で優勝したらそのまま全国に出場できるのですが、当時秋は東北と、北海道で、1校しか全国へ出られなかったのですが、自分が1年の時の秋は、北海道で優勝し、東北との代表決定戦で東北福祉大学に敗れました。当時の福祉大はものすごく強く、エースが、一昨年、メジャーから、楽天にきた斎藤投手で、キャプテンが、昨年阪神を引退したアベキ金本選手、プロに7、8人いましたね。その福祉大とも負けはしましたが、2-0の試合をするなど、札大も強かったと思います。大学4年になるときの春の合宿で、毎年、3月中旬から4月上旬にかけての3週間ほど、埼玉、群馬のほうに行っていたのですが、4年になる年ですから、最上級生になるわけですが、でも、そこで夜に、丹野監督さんと自分たち4年生が一杯やるんですけれども、そこで、丹野先生は、「お前たちは、自分のやってきた高校野球が一番だと思ってるからそれをまとめるのが大変なんだ」ということを言いました。そう言われればそうかと、気づかされました。札幌に戻ってからは、とにかく監督が求めるホームランを打つための練習をしました。今考えると、今頃なんですけれども。高校時代の山本先生は、ホームランなんていらぬという先生でしたから。下手するとホームランを打ったら怒るような感じでした。「かんちがいするな」とか「ホームランを打つとバッティングを崩す」なんてよく言われてました。高校時代の自分たちには確かにそうだったのかもしれませんが。とにかく、大学4年時は、初めてホームランを打つために、トレーニングや、スイングスピードを上げるとか、ボールを上にあげるための練習をしました。ある時、監督さんに「このバットでホームラン打てるようになったら使ってやる」と言われました。普通のバットより重いバットだったのですが、結局なんとか打てるようになりました。レギュラーとして使ってもらえるようになりました。小学3年から野球を始めて一打だけやることがないポジションがあった、それが、セカンド、二塁手なんですけれども、その二塁で試合に出ることができました。これも、高校時代に冬の練習の中で、いろんなパターン練習を教えてくれた山本先生のおかげだと思います。

丹野先生のほうは、今は大学の監督を降りられているんですけれども、今でもたまに連絡を取ることがあるんですが、帯広に来て、すぐの時は、何もなかったものですが、から、丹野先生から、使い古しのボールとか、バットをいただきまして、本当にありがたかったし、助かりました。

北・北海道大会の決勝で勝った後、球場を出るときに携帯電話を確認したところ、着信が100を超えておりまして、メールを自分にはあまりやらないのですが、ショートメールが80何件入っていたんですけども、その中に、丹野先生からのメールもありまして、「網野、よくやった。いいチームをつくった。」って入っていました。すぐに電話いたしました。「監督さん、わざわざメールありがとうございます」といことを言いましたら、「おお、ほんとによくやった。おめでとう」と言ってくれました。そして、「いいか、こうなったら、全国優勝狙ってやるんだぞ」って言うんで「はいええ、そんな力のあるチームじゃありませんから」何て答えましたら、すぐさま、「何言ってるんだ。だからお前はだめなんだ。いいか、網野、よく聞け、高校生は紙一重だ。お前たちのときだって、お前たちと、東北福祉や、東京の大学とだったら実力的には大分差があったけど、それでも試合になったじゃないか、高校生なんて、短い期間でもいくつも伸びていくぞ。そう考えたら、本当に紙一重だぞ、お前がどれだけ伸ばして、その気にさせるかだ」と言われました。帯広に戻ってからも2、3日、電話やメールが結構来ておりまして、両方合わせると、何百にかは、なるとは思いますが、みなさん「おめでとう」「よかったね」「よくやったね」って言ってくれましたけれども、勝ったその日に、「だからお前はだめなんだ」って言ってくれた人は丹野監督だけでした。本当にありがたかったです。

実は、7/31に甲子園入りしまして、8/5組み合わせ抽選、8/8開幕といった日程だったのですが、まず、組み合わせが決まるまで、眠れなかったです。全国から、強豪校が集まるわけですから、ものすごいチームとあたって、20-0、30-0で負けたらどうしようと思ったりですね。そんな試合をして千歳空港に着いたら、石をぶつけられるんじゃないかとも思いました。でも、丹野監督に言われたことを思い出して、少しでも伸ばすことができたら、紙一重になるかもしれないと自分自身に言い聞かせまして、気持ちを落ち着けるようにしていました。もし、丹野先生にああいう言い方をされなかったら、特に、甲子園入りしてから、調整なんて言って、練習を、軽くというか、温くしかやらなかったかも知れませんね。向こうに入ってから結構厳しくというか、限られた時間内でも、少しでも上手くなる、強くなるんだと言い聞かせながらできました。その結果あのような接戦に持ち込めたのかなと思います。このように、山本先生、丹野先生お二人に出会えたことが、現在でも私の支えになっているんですけれども。

最初にちょっとお話ししました。帯広大谷に赴任した一番最初の4人の子たちですね、今でもやっぱり自分自身の支えになっておりまして、4人のうち、2人は野球経験者だったんですけど、1人は、中学時代、卓球部でうまい人は何もやっていなくてですね、高校入学後は、美術部に入る予定だったらしいんですけど、4人で1年間やりまして、翌年、9人の1年生が入部してきてまして、経験のある3年生2人にも手伝ってもらって、試合に出られたのですが、結果は、帯広工業に1-21の5回コールドで敗れました。その時にもちろん助っ人の3年生は引退ですけども、入ってきた1年生9人も全員やめると言ってきてまして、困ったんですけども、引き留めるだけの要素が何も無くてですね、また4人に戻ってしまっただんですが、その4人にも、野球をやめて、ほかの部に入っていよいよ言いしました。そしたら、「先生、ちょっと4人で話し合いますから、時間をください。」っていうんです。いいよ。と言って、私自身は、4人全員やめようと思っておりまして、また、4人きりのさみしい練習になるし、ましてや、練習場所もままならず、日々転々としてたわけですから。しばらくして、職員室に来てですね、「4人で最後まで野球をやります。来年また新しい1年生が入部してくるかもしれないし、もし入部してこなくて、試合に出れなくても最後までやります。」と言ってきました。何度も確認したんですけど。グランドもまた、無いし、本当に出られないかもしれないよ。でも、最後まで、やりたいと言ってきました。その時のことが今でもはっきりと思い出されますし、自分自身もプレーヤーとして、やっていた時のつらさなんて、この4人の選手たちに比べたら、そのかけらほどにもならないと思いました。今でもたまに、特に、道具を粗末にしていた時なんかは、この4人選手たちのことを言って生徒を叱ることがあります。そういう意味では、この選手たちと出会えて、この選手たちが最後までやってくれたことで、今の選手たちを注意できるというか、一つ、成長させることにつながっているのかなと思います。また、先ほども言いましたが、昨年甲子園に出場できた生徒たちに出会えたその源になっていると思います。

昨年の生徒ですが、よく、「やっぱり、今までのチームの中で一番強かったのですか？」ということ聞かれるのですが、自分は、決してそうは思わないんです。力的には、初めて北・北海道大会に出場したチームが一番強かったかなと思います。今まで、私自身17年目で、最初の1年目は、試合に出られなかったわけですから、16チームを監督することができたんですけども、おそらく、3番目か、4番目ぐらいの力かなと思います。こんなこと言うとかの子たちに怒られるかも知れませんが、じゃあ、どうして甲子園に行けたのかと言いますと、こうだったから、何てことは自分もわからないんですけど、もちろん、いろんな要因が重なっていたとは思いますが、例えば、組み合わせ抽選とか、試合日程なども、もちろんあったと思いますが、組み合わせで、やぐらの一番左側に来て、準決勝の前に2日休みましたし、抽選もですね、自分たちにとってはいい方向に動くことが多かったですね。でも、一番は、このチームの特徴として、良くも悪くも、その気になりやすいといえますが、調子に乗りやすい子が多かったと思います。そういう意味では、今までのチームの中では、一番でした。良くも悪くも言いましたが、どちらかと言うと、悪く働くことが多くて、私も、部長も、こいつらは、手綱を緩めることはできないなとしょっちゅう言っていました。また、勉強もできなかった生徒が多かったですね。ま、誰とは言えないですけども。ただ、やっぱり良い部分もありまして、実は、夏の甲子園につながる十勝支部予選が始まったのが、6/23からなんですけれども、その前の週まで練習試合を毎週やっておりまして、8連敗して本番の大会を迎えておりました。ですから、6月に入ってから、ほとんど練習試合では勝ってないまま本番に入りました。もちろん、甲子園を狙っている強いチームともやっておりましたけれども、それでも8連敗して本番に入るというのは初めてでした。でもこの選手たちは、あまり気にしないといえますが、切り替えが早いといえますか、いいほうに考えて、本番では、ここを修正して、絶対勝つという感じは見受けられました。ですから、北・北海道大会でも、甲子園でも、十分力を発揮してくれたと思います。最後にホームランを打った亀井は、中盤の大事な場面で、スリーバント失敗している選手なんですけれども、普通の選手だったら落ち込んでしまうかもしれませんが、まったく引きずらないで、最高のバッティングをしてくれたと思います。そういう切り替えのよさとか、いいほうに考えるというのは、言ってもなかなかできるものじゃなくて、育ってきた環境や、友人、チームメート、チームの雰囲気とか、いろんな要素があって、できていくと思うんです。今、亀井を例に挙げて言いましたが、そういう選手が本当にこのチームには多かったかなと思っています。こういう要素をもった選手に出会えて甲子園につながったとも思っています。

最後になりますが、今、「人と出会い、甲子園へ」ということで、自分の恩師のお二人の先生と、最初の4人の選手たち、そして、今回のメンバーのことも少し、話させていただきましたが、このたびの、甲子園出場は、自分ひとりでできたことは何一つなくてですね、たくさんの人に出会えた結果だと改めて感じているところがあります。もちろん他にもたくさん勉強させてくれた人がおりまして、生徒であるとか、指導者もそうですし、これは、野球の選手とか、野球の指導者に限ったことではないと思うんですけど、これからも人との出会いを大切に、そこから自分自身、少しでも成長し、生徒たちの夢に少しでも近づけるように努力していきたいと思っています。本日は、ありがとうございました。

■プロフィール 網野 元氏 1972年4月11日生まれ 渡島管内知内町出身
帯広大谷高等学校 公民科教諭 野球部監督
1982年 知内町立中の川小学校 三年次より野球を始める(六年次主将)
1987年 知内町立知内中学校 三年次同校初の中体連渡島・函館大会優勝
中体連北海道大会三位(三年次主将)
三年次同校初の函館支部予選優勝
南・北海道大会一回戦敗退
1990年 北海道知内高等学校 世年次札幌六大学リーグ優勝
1994年 札幌大学 札幌六大学・北海道六大学代表決定戦優勝
北海道・東北代表決定戦敗退
1997年 帯広大谷高等学校 公民科教諭として着任

■会長報告



1月最後の例会です。各界の新年会もそろそろ落ちついたところですね。先週実施しました健康診断の検査結果が出ておりますので、各自体調管理の指針にしていいただければ幸いです。

さて、今月号のガバナー月信Vol.7読本ガバナーのメッセージの中に、「北海道ロータリーEクラブ」設立準備のお話が掲載されていました。なかなか進まぬ会員増強への突破口として、Eクラブ設立は読本ガバナーの熱意と挑戦であると思います。時代の変化は、ロータリアンの高齢化問題と併せて、ロータリー運動にも大きな影響を与えています。ぜひ、良い結果が導かれますよう期待したいと思います。昨年開催された規定審議会の様子が瞬時にfacebook、ホームページに掲載され、世界中のロータリアンが情報を共有出来るようになりました。田中PDGの時代とは、随分勝手が違い驚く事が多いと思います。昨年、当クラブも次年度の組織改変に向けて定款変更をさせていただきましたが、さらに定款・細則の改変を進めたいと考えています。どうぞみなさまお気づきの点がありましたら、アドバイスよろしくをお願いします。

また、本日は昨年甲子園出場で私達に感動をくださいました帯広大谷高等学校野球部監督の網野元さまより卓話をいただきます。監督のお話から、未来の帯広RC創造のため、それぞれの立場で勉強をさせていただきたいと思っています。どうぞよろしくをお願いします。

■会務報告

小田 剛 幹事

①帯広RC、第5回クラブ協議会開催のご案内

日 時 1月29日(水)午後6時
場 所 ホテル日航ノースランド帯広
会 費 2,000円
出席義務者 理事・役員・各委員長

②帯広5RC・芽室RC・音更RC、7RC合同例会開催のご案内

日 時 2月12日(水)午前11時45分～午後1時30分
場 所 ホテル日航ノースランド帯広
講 師 小田島裕一氏 (有)ゴーアヘッドジャパン取締役

演題：国境を越えた人間作りから見える国際理解
～スケジュール～・11:45～ 会 食 ・12:40～13:20 講 演
・12:15～ 例会開始 ・13:30 例会終了

※帯広西RCは、2月13日(木)の繰上げ例会と致します。

帯広北RCは、2月14日(金)の繰上げ例会と致します。

帯広南RCは、2月17日(月)の繰上げ例会と致します。

帯広東RCは、2月18日(火)の繰上げ例会と致します。

④・帯広南RC、2月10日(月)の例会は、休会と致します。

・帯広東RC、2月11日(火)の例会は、祝日のため休会と致します。

⑤帯広RAC、例会開催のご案内

日 時 2月9日(日) 10:00～14:30
場 所 然別湖畔温泉ホテル 風水
内 容 3ブロック合同例会(四 役)

■委員会報告

・出席報告

1月29日例会の報告 会員総数90名(内免除会員5名) 出席者数59名(内免除会員1名)
1月15日例会のメークアップを含む出席者数及び出席率 69名 80.2%

・ニコニコ献金

小水 基弘 会員

先週、本人からも宣伝があったと思いますが、私のロータリーの推薦者である野村文吾君が題材になったミュージカル「KACHIBUS」が2/14・15帯広にて公演されます。チケットがまだ残ってますので是非、購入して下さい。

小林 一夫 会員

先週の例会で、私がテーブルマスターをつとめるテーブルが全員出席となりました。出席ありがとうございました。

・出席表彰記念 小田 剛 副会長 小林 善之 会員

■ボールハリス表彰



■誕生記念日祝 廣田 誠 会員

■次週プログラム予定

2月5日(水)「スマートライフの実現に向けて」 (プログラム委員会)
廣田 誠 会員



例会日 / 水曜日 12:30 ～ 13:30

例会会場 / ホテル日航ノースランド帯広 TEL0155-24-1234

- 創立 / 昭和 10 年 3 月 15 日 ●認証番号 / 3820 ●戦後再開 / 昭和 25 年 12 月 19 日
- 事務局 / 帯広市西 3 条南 9 丁目 経済センタービル 4F TEL0155-25-7347 FAX0155-28-6033
- 発行 / クラブ広報
- 委員長 / 大和田三朗・副委員長 / 中島 一晃
- 委 員 / 下山 正志・野村 一仁・伊藤 誠吾・高橋 猛文・河村 知明
- ホームページアドレス / <http://www.obihiro-rc.jp>